

短期大学生の英語基礎力の推移

—2002 年度から 2025 年度までの入学時英語テスト結果の分析—

中島 直樹

1. はじめに

城西短期大学は 1983 年 4 月に女子短期大学部として開学し、2026 年 3 月に閉学する。開学時には英米文学専攻が設置され、短期大学の英語教育の中心を担った。主に英米文学専攻所属の教員が他の 3 つの専攻（経営実務専攻・秘書専攻・日本文学専攻）の週 2 コマの英語必修科目および選択科目を担当していた。2001 年の改組により経営情報実務学科・現代文化学科が開設された後も、年間を通じて週 2 コマの英語の授業は維持され、その後 2004 年に組織された語学教育センターと協働で授業が実施された。この方式は 2006 年のビジネス総合学科開設を経て閉学時まで続けられた。グローバル人材の育成という大学の方針に従い、授業名は「英語 I A・I B・I C・I D」から「TOEIC イングリッシュ I A・I B・I C・I D」へ、さらに「コミュニケーション基礎英語 A・B・C・D」へと変更された。また、授業内容も、基礎に重点を置きつつ実践的な英語コミュニケーションを重視するものへと改められた。クラス分けについても、授業の効率化と学生のレベルアップを図る目的で学籍番号順から能力別クラス編成へと変更された。

このような流れの中で、少子化の波や女子の四年制大学志向など、短期大学を取り巻く環境が大きく変化したことにより入学者数が減少し、それに伴い多様な学力層の学生が入学するようになった。入学生の英語力低下の傾向は年々顕著となり、高い学力を有する学生の入学は次第に減少していった。学生間のレベル差も顕著になり、基礎力のある学生と乏しい学生の格差が拡大した。こうした状況を背景として、授業開始前に学生一人ひとりの英語力を把握しておく必要が高まった。また、ビジネス総合学科では、専門的学習成果を「職業人として活躍できる幅広い教養と、英語、情報、メディア、会計、販売・接客、事務処理等のビジネススキル」、さらに、「コミュニケーション基礎英語」の学習成果を「実際のコミュニケーションで活用できる基礎的な英語力」と定め、その測定方法も求められた。このような経緯から英語力調査が実施されることとなった。この調査は、2002 年度から短大最後の入学生となる 2024 年度まではほぼ継続して行われ、毎年 4 月と 1 月（年度によっては 12 月）に年 2 回実施された。4 月に 1 回目の試験を行い、同年度の 12 月あるいは 1 月の最終授業時に前回と全く同じ条件で同じ試験を実施することにより、どの程度スコアが向上したかを調査し、上

記の学習成果の測定を試みる取り組みであった。また、その年度の英語力調査の結果を、それ以前の年度の結果と比較することにより、それまでの学生との違いを明らかにすることができ、授業の改善が可能であった。城西短期大学閉学にあたり、2002 年度から 2024 年度まで実施してきた英語力調査の結果を整理・分析し、短期大学生の英語基礎力の推移を明らかにするとともに、この 20 年以上の試行錯誤を今一度振り返ることによって、今後の城西大学の英語教育に資することを本稿の目的とする。

2. 2002 年度から 2024 年度までの英語力調査の結果についての検証

はじめに、2002（平成 14）年度の英語力調査結果から振り返る。英語力調査は 2002 年以前にも数年間実施されていたが、2002 年度に問題を大幅に改訂し、その後 2024 年度まで同一問題を継続して使用したため、年度間の比較が可能となっている。出題形式は全問マークシート方式、試験時間は 1 時間、全 50 問で 100 点満点の試験であった。93 名が受験し、全体の平均点は 56.9 点であった。学科別の受験者数と平均点は表 1 の通りである。

表 1 2002 年度英語力調査結果（4 月実施）

学 科	受験者数	平均点
経営情報実務	67 名	57.8 点
現 代 文 化	26 名	54.7 点
全 体	93 名	56.9 点

実際の得点分布を見ると、得点のばらつきが大きかったことが分かる。90 点以上のかなり基礎力のある学生が 6 名、次いで 75 点から 89 点までのある程度基礎力のある学生が 10 名、29 点以下のほとんど基礎力のない学生が 7 名おり、その間には 30 点から 74 点までの中間層が存在していた。中間層の中にもいくつかの山があり、60 点から 74 点までの上位の層（26 名）と 45 点から 59 点までの中位の層（24 名）と 30 点から 44 点までの下位の層（20 名）におおよそ分類でき、この 3 つの層が 2002 年度の新入生全体に占める割合は 75 パーセント以上であった。

次に、2003（平成 15）年度の結果について検討する。59 名の新入生全員が受験し、全体の平均点は 54.5 点であった。学科別の受験者数と平均点は表 2 の通りである。

表 2 2003 年度英語力調査結果（4 月実施）

学 科	受験者数	平均点
経営情報実務	47 名	55.0 点
現 代 文 化	12 名	52.6 点
全 体	59 名	54.5 点

前年度の英語力調査の平均点と比較すると、経営情報実務学科においては 2.8 点、現代文化学科においては 2.1 点、全体では 2.4 点下がった。また、この年度も経営情報実務学科の平均点の方が現代文化学科よりも高い結果となった。得点分布の形にもある程度の変化が見られた。前年度と異なる点は、90 点以上のかなり基礎力のある学生が 1 名もいなくなった（前年度は 6 名）ことと、中間層の領域の形が逆転したことであった。30 点から 74 点までの中間層にはいくつかの山があることが前年度の英語力調査で分かっていた。そして、前年度は 60 点から 74 点までの上位の層に 26 名、45 点から 59 点までの中位の層に 24 名、30 点から 44 点までの下位の層に 20 名の学生がいて、得点層が上位になればなるほどそれだけ学生数も多かったが、2003 年度は上位の層に 16 名、中位の層に 17 名、下位の層に 17 名と、中間よりやや下に比重が移っていた。

次に、2004（平成 16）年度の結果について検討する。43 名の新生が入試を受験し、全体の平均点は 50.5 点であった。学科別の受験者数と平均点は表 3 の通りである。

表 3 2004 年度英語力調査結果（4 月実施）

学 科	受験者数	平均点
経営情報実務	33 名	50.5 点
現 代 文 化	10 名	50.4 点
全 体	43 名	50.5 点

前年度の平均点と比較すると、経営情報実務学科においては 4.5 点、現代文化学科においては 2.2 点、全体では 4.0 点下がった。調査を始めた 2002 年度から年々下降の一途をたどっており、短大に入学してくる学生の英語基礎力が年々低下していたことを如実に示す結果となっていた。全体の得点分布は基本的には前年度とそれほど変わっておらず、前年度をほぼ継承していた。90 点以上のかなり基礎力のある学生が 1 名もいなくなったことも、中間層の形が逆転したことも前年度と同様であった。75 点から 89 点までのある程度基礎力のある学生は 5 名となり、前年より 3 名減少した。中間層の中を詳しく見ると、60 点から 74 点までの上位の層に 9 名、45 点から 59 点までの中位の層に 13 名、30 点から 44 点までの下位の層

に13名の学生がいた。2002年度には、得点層が上位になればなるほどそれだけ学生数も多かったが、2003年度から中下位に比重が移り、その傾向は2004年度も続いていた。

次に、2005（平成17）年度の結果について検討する。80名が受験し、全体の平均点は56.5点であった。学科別の受験者数と平均点は表4の通りである。

表4 2005年度英語力調査結果（4月実施）

学 科	受験者数	平均点
経営情報実務	57 名	56.9 点
現 代 文 化	23 名	55.5 点
全 体	80 名	56.5 点

前年度の平均点と比較すると、経営情報実務学科においては6.4点、現代文化学科においては5.1点、短大全体では6.0点上昇した。前の年の平均点を上回ったのは初めてのことであった。2005年度は、奨学金制度が充実していたため、高等学校の評定平均値3.5以上の学生が多く入学し、基礎学力を持って入学した新入生たちが平均点を押し上げた。数値的に見ると、2002年度の水準まで上昇した結果となった。全体の得点分布を見ても、短大全体では6.0点も平均点が上昇したので、まったく異なった形になった。90点以上のかかなり基礎力のある学生は1名もいなかったが、75点から89点の範囲にある、ある程度基礎力のある学生が19名おり、この層が平均点上昇の要因となっていた。受験者数が80名なので、約4名に1名がここに属していたことになり、この年度の躍進を支えた原動力のひとつになっていた。29点以下のほとんど基礎力のない学生が6名いたが、この割合は前年度とほぼ同じであった。30点から74点までの中間層は55名であった。この中間層の中を詳しく見ると、60点から74点までの上位の層に18名、45点から59点までの中位の層に16名、30点から44点までの下位の層に21名の学生がいた。前年度は、得点層が下位になればなるほどそれだけ学生数も多かったが、2005年度はどの層にもほぼ均等に数が分布していた。2003年度以降、中下位層に比重が移り、平均点低下の大きな要因となっていたが、2005年度になってその傾向はようやく変化した。

次に、2006（平成18）年度の結果について検討する。82名が受験し、全体の平均点は48.3点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表5である。

表5 2006年度英語力調査結果（4月実施）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	82 名	48.3 点

この年度に経営情報実務学科と現代文化学科が統合されてビジネス総合学科が誕生した。新学科になって初めての英語力調査であったが、前年度の平均点 56.5 点から 8.2 点下落の 48.3 点となった。前年度にいったん上昇に転じたが、2006 年度にまた大きく下げた。上昇の流れがわずか一年で途絶えてしまった。前年に創設された特別奨学金制度が一年で廃止された影響が大きかったと推測される。全体の得点分布を見ると、受験者数は前年とほぼ同数であったにもかかわらず、形は前年とまったく違うものになっていた。前年はどの層にもほぼ均等に数が分布していた。基礎力のない学生もいたが、基礎力のある学生もほぼ同数いた。特に、前年は 75 点から 89 点までのある程度基礎力のある学生が 19 名もいて、この層が本学の全体的な底上げの役目を果たしていたが、2006 年度はその層には 6 名しかいなかった。ピークは 40 ～ 44 点のところにあり、16 名が集中していた。29 点以下のほとんど基礎力のない学生が 9 名いたが、この層に関しては、前年の 6 名と大差がなかったと考えてよいかもしれない。90 点以上のかなり基礎力のある学生が 1 名もいなかったことも前年と同様であった。中間層の上位の層には 15 名おり、前年の 18 名とほとんど変わりはない。しかし、中位の層は前年の 16 名から 7 名増の 23 名、下位の層は 21 名から 8 名増の 29 名となっており、中間層の中でもとりわけ中下位の増加が目についた。つまり、75 点から 89 点までのある程度基礎力のある学生の層が減少した分がここに集まっていたのである。前年度は奨学金制度が充実していた年度であり、高校の評定平均値 3.5 以上の学生が多く入学し、ある程度基礎力のある学生の層の中核となっていたが、2006 年度は奨学金制度の廃止に伴い、その層が激減し、代わりに中間層の中下位の学生が増えた。これが平均点を 8.2 点低下させた主な要因であったと考えられる。

次に、2007（平成 19）年度の結果について検討する。受験者数 69 名、全体の平均点は 51.0 点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表 6 である。

表 6 2007 年度英語力調査結果（4 月実施）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	69 名	51.0 点

ビジネス総合学科になって 2 回目の英語力調査であったが、前年度の平均点 48.3 点から 2.7 点上昇の 51.0 点となった。前年度と比べ、平均点が若干上昇したため得点分布の形状にわずかな変化が見られたが、特に大きな変化ではなかった。得点のより低い層により多くの学生が集中するというそれまでの傾向を継承していたと考えられる。30 点から 74 点までの中間層を見ると、60 点から 74 点までの上位の層に 12 名、45 点から 59 点までの中位の層に 18 名、30 点から 44 点までの下位の層に 22 名となっており、やはり基礎力のない学生の多さが目立っ

た。75 点から 89 点までのある程度基礎力のある学生の層は、前年の 6 名から 11 名に増加していた。前年度のピークは 40 ～ 44 点のところにあったが、2007 年度は 50 ～ 54 点に移動しており、これらが 2007 年度の英語力調査の好ましい傾向であった。

次に、2008（平成 20）年度の結果について検討する。受験者数 81 名、全体の平均点は 51.0 点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表 7 である。

表 7 2008 年度英語力調査結果（4 月実施）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	81 名	51.0 点

受験者数は 12 名増加、平均点は前年とほぼ同じであった。だが、前年度と比べ、得点分布の形はわずかに異なっていた。ピークは 50 ～ 54 点と 40 ～ 44 点のところにあり、いずれも 10 名。30 点から 74 点までの中間層を見ると、60 点から 74 点までの上位の層に 15 名、45 点から 59 点までの中位の層に 23 名、30 点から 44 点までの下位の層に 22 名となっており、中位の層が下位の層を 1 名ではあるが上回った。得点のより低い層により多くの学生が集中しやすい傾向は変わっていなかったが、中位の層が増加したことはよい傾向であった。85 ～ 89 点の層に 5 名、90 点以上のかなり基礎力のある学生が 2 名いたことも注目すべき結果であったが、29 点以下のほとんど基礎力のない学生が 11 名（前年は 6 名）おり、平均点が上がらない原因になっていた。高得点の学生も存在した一方で、同数程度の著しく得点の低い学生も存在し、平均すると前年並みであった。

次に、2009（平成 21）年度の結果について検討する。受験者数 69 名、全体の平均点は 46.0 点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表 8 である。

表 8 2009 年度英語力調査結果（4 月実施）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	69 名	46.0 点

受験者数は 12 名減少、平均点は前年と比べ 5 点マイナスであった。得点分布の形も当然異なっていた。前年度のピークは 50 ～ 54 点と 40 ～ 44 点のところ（いずれも 10 名）にあったが、2009 年度は 30 ～ 34 点のところの下がってきており、12 名の学生がここにいた。また、第 2 のピークもその前後の 40 ～ 44 点と 20 ～ 24 点にあり、低得点層の膨らみが目立った。30 点から 74 点までの中間層を見ると、60 点から 74 点までの上位の層に 14 名、45 点から 59 点までの中位の層に 14 名、30 点から 44 点までの下位の層に 24 名となっており、下位

の層の占める割合がかなり多かった。29 点以下のほとんど基礎力のない学生も 12 名おり、前年と同様、この層が平均点を大きく押し下げていた。90 点以上のかなり基礎力のある学生が 2 名（内 1 名は留学経験者）いたことが唯一の明るい結果であった。

次に、2010（平成 22）年度の結果について検討する。受験者数 81 名、全体の平均点は 53.5 点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表 9 である。

表 9 2010 年度英語力調査結果（4 月実施）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	81 名	53.5 点

受験者数は 12 名増加、平均点は前年と比べ 7.5 点上昇であった。前年と比べて平均点が大きく上昇した年は過去には 2005 年度のみであったので、これが二度目である。7.5 点の上昇は 2005 年度の 6.0 点を上回っていた。2005 年度は奨学金制度が充実し、多くの優秀な学生が入学して平均点が上昇した。しかし 2010 年度は 2005 年度のような奨学金制度はなかったが、大きく平均点が上昇した。その原動力となったのが 3 月の入試で入学した学生達であった。彼らのほとんどが城西大学やその他文系の 4 年制大学の受験に失敗し、第二希望で短大に入学した。一度は受験勉強を経験した実績と短大卒業後に編入したいという気持ちを持ち合わせた彼らが平均点を押し上げたのだと推測される。従来、短期大学の入学生には、いわゆる受験勉強を経験せずに入学者も少なくなかった。そのような状況の中で、2010 年度は受験に失敗した学生たちが学力分布に変化をもたらした。得点分布の形を見ると、前年度のピークは 30 ～ 34 点のところにあり、12 名の学生がそこにいた。また、第 2 のピークもその前後の 40 ～ 44 点と 20 ～ 24 点にあり、低得点層の膨らみが目立っていた。それに対して、2010 年度のピークは 50 ～ 54 点と 40 ～ 44 点のところに上がってきていて、10 名の学生がここにいた。第 2 のピークは下方 30 ～ 34 点のところ（前年度のピーク）に 9 名いたが、70 ～ 74 点に 7 名、60 ～ 64 点に 6 名、両ピーク間の 45 ～ 49 点に 6 名おり、前年の下膨れした形とは明らかに異なっていた。29 点以下のほとんど基礎力のない学生は前年の 12 名から 8 名に減っていた。90 点以上のかなり基礎力のある学生は 4 名おり、前年より 2 名増えていた。

次に、2011（平成 23）年度の結果について検討する。57 名が受験し、全体の平均点は 43.7 点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表 10 である。

表 10 2011 年度英語力調査結果（4 月実施）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	57 名	43.7 点

受験者数は24名減少、平均点は前年と比べ9.8点下落であった。受験者数は大幅減、平均点も調査を始めてから閉学までの過去最低、下げ幅も過去最大であった。前年に7.5点と大幅に上昇しただけに望ましい結果とは言えなかった。過去に平均点が前年より大きく上昇した年度は2005年度と2010年度の二度であったが、いずれも翌年には大きく平均点を下げていた。特に2011年度の下げ幅は大きく、2006年度の8.2点下落を上回っていた。2005年度は、奨学金制度が充実していた年度であり、多くの優秀な学生が入学して平均点が上昇した。また2010年度は、4年制大学の受験に失敗して短大第二希望で入学した学生たちが、短大卒業後に4年制大学に編入したいと強く思い、また受験勉強をした経験を活かして平均点を押し上げた。このように考えてみると、2005年度と2010年度の二年だけが例外であって、当時の短大入学者の英語基礎力は年々著しく下がっていたと言わざるをえない。得点分布を見ると、ピークは40～44点のところにあり、12名の学生がここにいた。第2のピークは50～54点のところに8名いたが、1名少ない7名の学生が20～24点のところにいて第3のピークを形成していた。90点以上のかなり基礎力のある学生はいなくなり、最高点は86点、次点は78点であった。グラフの形も以前の下膨れした形にもどっていた。39点以下の学生が20名もあり、それが全体の35パーセント以上を占めるという非常に厳しい結果であった。

次に、2012（平成24）年度の結果について検討する。54名が受験し、全体の平均点は44.9点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表11である。

表11 2012年度英語力調査結果（4月実施）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	54名	44.9点

受験者数は3名減少、平均点は前年と比べ1.2点の上昇であった。前年の英語力調査で過去最低を記録し、2012年度の結果が注目されたが、受験者数も平均点も前年とほぼ同程度の結果となった。依然として短期大学の開学以来の過去最低水準であった。平均点が45点を下回った年は2011年度と2012年度の二年度だけであり、いかにこの年の短大1・2年生に英語基礎学力の不足が顕著であったかが分かる。得点分布の形を見ると、前年度と同様ピークは40～44点のところにあり、12名の学生がここにいた。30～34点に8名、50～54点に7名おり、これらが第2のピークを形成していた。第3のピークは65～69点と20～24点にあり、それぞれ6名の学生がいた。最高点は92点、次点は88点であり、その次はずっと下って74点であった。2002年以来、30点から74点までの層を中間層としてきたが、2012年度はその中間層およびそれ以下の層が54名中52名を占め、かつてはある程度存在していたそ

れ以上の層がほぼ消滅してしまった。中間層の中を詳しく見ると、60 点から 74 点までの上位の層に 9 名、45 点から 59 点までの中位の層に 13 名、30 点から 44 点までの下位の層に 21 名となっていて、やはり下位の層ほど人数が多くなっていた。29 点以下のほとんど基礎力のない学生は 9 名、90 点以上のかかなり基礎力のある学生は 1 名であった。

次に、2013（平成 25）年度の結果について検討する。51 名が受験し、全体の平均点は 45.8 点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表 12 である。

表 12 2013 年度英語力調査結果（4 月実施）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	51 名	45.8 点

受験者数は 3 名減少、平均点は前年と比べ 0.9 点の上昇であった。過去二年続けて最低レベルに留まっていたが、受験者数も平均点も前年とほぼ同程度であった。2011 年度から 2013 年度にかけては、三年連続 45 点前後という非常に低い結果であった。得点分布の形を見ると、ピークは 40～44 点と 30～34 点のところにあり、それぞれ 9 名の学生がここにいた。第 2 のピークは 55～59 点にあり、7 名の学生がいた。次いで、45～49 点のところに 6 名、50～54 点と 35～39 点のところにそれぞれ 5 名となっていた。30 点から 74 点までの中間層を見ると、60 点から 74 点までの上位の層が激減してわずか 3 名、45 点から 59 点までの中位の層に 18 名、30 点から 44 点までの下位の層に 23 名となっていて、2013 年度は特に中下位の比重が大きかった。中間層以下が 51 名中 48 名を占め、かつてはある程度存在していたそれ以上の層がほぼ消滅してしまったのは前年と同じであった。29 点以下のほとんど基礎力のない学生は 4 名（前年は 9 名）に減っていたが、中間層上位の層も減っていたことで相殺され、前年と同程度の平均点となっていた。2013 年度は中間層中下位に特に多くの学生が集中しているという傾向がよく見てとれた。90 点以上のかかなり基礎力のある学生は 1 名もいなかった。最高点は 88 点、次いで 82 点、80 点、70 点と続いていた。

次に、2014（平成 26）年度の結果について検討する。66 名が受験し、全体の平均点は 55.7 点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表 13 である。

表 13 2014 年度英語力調査結果（4 月実施）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	66 名	55.7 点

受験者数は 15 名増加、平均点は前年と比べ 9.9 点の上昇であった。過去三年続けて最低レ

ベルに留まり、平均点 45 点前後という短大がかつて経験したことがない低レベルに悩まされていたが、ここで大きく上昇した。10 点近い上昇というのは過去に例がなかった。得点分布を見ると、ピークは 50 ～ 54 点のところにあり、11 名の学生がここにいた。その前後の 55 ～ 59 点に 5 名、45 ～ 49 点に 6 名おり、大きな集団を形成していた。ピークが 10 点上がっていたことと、第 2 のピークがふたつあり、65 ～ 69 点と 30 ～ 34 点のところにそれぞれ 8 名いたことが 2014 年度の特徴であった。前年までは、ピークより下位の層の人数が上位の層よりも多く、グラフの形が下膨れしていたが、2014 年度はそれが逆転していた。30 点から 74 点までの中間層を見てみても、60 点から 74 点までの上位の層に 13 名、45 点から 59 点までの中位の層に 22 名、30 点から 44 点までの下位の層に 12 名となっており、前年が上位の層がわずか 3 名、下位の層が 23 名だったことを考えると、ここに 2014 年度の顕著な向上が確認できる。29 点以下のほとんど基礎力のない学生は 6 名、90 点以上のかなり基礎力のある学生は 5 名であった。この年度には、一般入試（薬学部・理学部）の短大第二希望で入学した学生が 16 名（坂戸キャンパス 12 名、紀尾井町キャンパス 4 名）おり、もともと短大第一希望であった 50 名の学生との得点の比較を行った。短大第一希望者 50 名の平均点は 51.1 点であったのに対し、短大第二希望 16 名のそれは 70.3 点とずば抜けて高かった。90 点以上の 5 名（内、紀尾井町キャンパス 1 名）はすべて第二希望者であった。このことから分かったことは、2014 年度の短大第一希望の学生のレベルは前後数年の中で最も高く、そこにさらにレベルの高い第二希望入学者が加わることで、全体として前年より平均点が 9.9 点向上したということであった。短大第二希望者がレベルを引き上げた例は 2010 年度にもあったが、当時は文系学部不合格の学生たちであり、数値的に見ても 2014 年度ほどの衝撃ではなかった。薬学部・理学部を不合格になったとはいえ、受験勉強の経験の有無が、基礎力確認テストの得点差に顕著に表れることが改めて実証された。

次に、2015（平成 27）年度の結果について検討する。65 名が受験し、全体の平均点は 48.0 点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表 14 である。

表 14 2015 年度英語力調査結果（4 月実施）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	65 名	48.0 点

受験者数は 1 名減、平均点は前年と比べ 7.7 点の下落であった。前年に 10 点近く上昇したので期待されたが、残念ながら大幅に下がってしまった。大きく上昇した翌年はその反動で大きく下落するという傾向がここでも見て取れた。得点分布を見ると、ピークは前年と比較して 20 点下がり、30 ～ 34 点のところに 12 名の学生がいた。第 2 のピークは 50 ～ 54 点（前

年のピーク)のところにあり、10名となっていた。30点から74点までの中間層を見ると、60点から74点までの上位の層に15名、45点から59点までの中位の層に18名、30点から44点までの下位の層に19名となっており、やはり中下位層の膨らみが目立った。前年が上位の層に13名、中位の層に22名、下位の層に12名だったことを考えると、下位の層の19名、特に30～34点のピークにいる12名が平均点を押し下げていることが分かる。29点以下のほとんど基礎力のない学生は前年より3名増えて9名、90点以上のかなり基礎力のある学生はゼロ(前年は5名)であった。80点以上も3名しかおらず、最高点は88点(紀尾井町キャンパス)、次いで82点が2名であった。

次に、2016(平成28)年度の結果について検討する。55名が受験し、全体の平均点は49.4点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表15である。

表15 2016年度英語力調査結果(4月実施)

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	55 名	49.4 点

受験者数は10名減、平均点は前年と比べ1.4点の上昇であった。前회가7.7点の下落であったので、やや不安があったが、前年と比較してわずかな上昇となった。得点分布を見ると、ピークは前年と比較して5点上がり、35～39点のところに8名の学生がいた。第2のピークはふたつあり、一つ目はピークのすぐ上の40～44点のところに7名の学生がいて、ピークと合わせて大きな集団を形成していた。もうひとつの第2のピークは50～54点のところにあり、同じく7名となっていた。30点から74点までの中間層を詳しく見ると、60点から74点までの上位の層に8名、45点から59点までの中位の層に15名、30点から44点までの下位の層に19名となっており、やはり中下位層の膨らみが目立った。ピークと第2のピークを含む下位の層の19名が大きく平均点を押し下げていることが分かる。2016年度の特徴は、80点以上の学生が、坂戸キャンパスに5名、紀尾井町キャンパスに1名の計6名(前年は3名)いたことであるが、29点以下のほとんど基礎力のない学生が7名おり、相殺される結果となっていた。最高点は96点(2名)、次いで90点、紀尾井町キャンパスの最高点は88点であった。坂戸キャンパスの平均点は49.3点、紀尾井町キャンパスの平均点は49.8点となっていた。

次に、2017(平成29)年度の結果について検討する。74名が受験し、全体の平均点は50.3点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表16である。

表 16 2017 年度英語力調査結果（4 月実施）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	74 名	50.3 点

受験者数は 19 名増、平均点は前年と比べ 0.9 点の上昇であった。2017 年度は日本人学生数が大幅に増加したので期待していたが、前年とほぼ同程度の水準となった。得点分布のピークは 40～44 点のところにあり、10 名の学生がここにいた。前年度のピークは 35～39 点であったので、5 点上昇していた。第 2 のピークは 3 つあり、一つ目は、ピークのすぐ下、前年のピークの 35～39 点のところに 7 名、二つ目は、そのすぐ下の 30～34 点のところに 7 名となっており、ピークを含めたこの 3 つが大きな集団を形成していた。3 つ目は 55～59 点のところに同様に 7 名となっていた。30 点から 74 点までの中間層の中の上位の層（60 点～74 点）と中位の層（45 点～59 点）と下位の層（30 点～44 点）を詳しく見ると、上位の層は 11 名、中位の層は 18 名、下位の層は 24 名となっており、下の層に行けば行くほど数が多くなり、グラフの形も下膨れしたものになっていた。75 点から 89 点までのある程度基礎力のある学生の層は 9 名おり、90 点以上のかなり基礎力のある学生 2 名を加えて 11 名の本学のトップ集団を形成していたが、29 点以下のほとんど基礎力のない学生が 10 名おり、相殺される結果となっていたのは前年と同じ傾向であった。坂戸キャンパスの平均点は 50.9 点、紀尾井町キャンパスの平均点は 49.1 点となっていた。最高点は 90 点が 2 名で、坂戸に 1 名、紀尾井町に 1 名となっていた。

これまで、2002 年度から 2017 年度までの結果を見てきたが、2018（平成 30）年度と 2019（平成 31）年度については、筆者が UC Riverside Resident Director として米国カリフォルニア大学リバーサイド校に派遣されたために試験が実施できず、この 2 年間についてはデータがない。2020 年 4 月に 2 年ぶりに再開する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大のため、前期においては授業開始が 5 月に遅れ、またオンデマンド型のオンライン授業が実施されたため前期には実施できなかった。後期においてもコミュニケーション基礎英語についてはオンライン授業が継続されたが、Zoom によるリアルタイム形式の授業に変更されたため、1 月には実施に至った。しかしながら、依然として対面ではなくオンライン形式であったため、WebClass でのオンライン試験とせざるを得なかった。2020 年度の試験がそれまでと違う点は、対面試験ではなく WebClass を利用した自宅でのオンライン試験であったこと、受験者数は全体の 4 分の 3 程度であったこと、1 月実施の年 1 回であったことの 3 点であった。

2020（令和 2）年度は、外国人留学生を除く 94 名が受験し、全体の平均点は 71.1 点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表 17 である。

表 17 2020 年度英語力調査結果（1 月実施：WebClass）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	94 名	71.1 点

単純に 2017 年 4 月実施の結果と比較すると、受験者数は 20 名増、平均点は 20.8 点の上昇となった。2020 年度は 1 月のみの実施であったので、ここでは直近の 2018 年 1 月に実施した 2017 年度第 2 回の結果を比較対象とした。2017 年度第 2 回（1 月実施）は 70 名が受験し、平均点は 52.3 点、最高点は 90 点、最低点は 14 点であった。同年度第 1 回目（4 月実施）より 2.0 点の上昇であった。2017 年度第 2 回の 30 点から 74 点までの中間層の中の上位の層（60 点～74 点）と中位の層（45 点～59 点）と下位の層（30 点～44 点）を見ると、上位の層は 12 名、中位の層は 17 名、下位の層は 22 名となっていた。75 点から 89 点までのある程度基礎力のある学生の層は 10 名、90 点以上のかなり基礎力のある学生は 1 名、29 点以下のほとんど基礎力のない学生は 8 名であった。これと比較すると 2020 年度の数値は非常に高かった。71.1 点という平均点の高さは過去に例がなく、2017 年度第 2 回の平均点 52.3 点から 18.8 点の上昇となっていた。得点分布グラフの中のピークはふた山あり、70～74 点と 50～54 点のところにそれぞれ 13 名の学生がいた。70 点台のピークというのも非常に高いレベルとなっていた。中間層に目を向けると、中間層上位の層に 28 名、中位の層に 21 名、下位の層に 6 名となっており、上に行けば行くほど人数が増える理想的な分布となっていた。さらに、75 点から 89 点までのある程度基礎力のある学生の層は 21 名、90 点以上のかなり基礎力のある学生は 18 名、29 点以下のほとんど基礎力のない学生はゼロであった。94 名中 87 名が 50 点以上で、50 点以下は 7 名のみとなっていた。前年までとは試験のやり方そのものが違うため単純に比較することには無理があると思われるので、この年度のデータは参考値として扱うにとどめる。

次に、2021（令和 3）年度の結果について検討する。2021 年度は、2017 年度までと同様に、同一問題を使用して対面形式で英語力調査を実施することができた。外国人留学生を除く 74 名が受験し、全体の平均点は 52.1 点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表 18 である。

表 18 2021 年度英語力調査結果（4 月実施：対面）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	74 名	52.1 点

信頼できるデータとして最も新しい 2017 年 4 月実施の結果と比較すると、受験者数は同

数の74名、平均点は1.8点の上昇となった。得点分布グラフを見ると、ピークは2017年度と同じ40～44点のところにあり、11名の学生がここにおいて2017年度の10名と大差はなかった。第2のピークはふたつあり、60～64点と30～34点のところにそれぞれ8名となっていた。60～64点という高いレベルにある程度の学生が集まって第2のピークを形成することは比較的珍しく、グラフも興味深い形になっていた。30点から74点までの中間層の中の上位の層（60点～74点）と中位の層（45点～59点）と下位の層（30点～44点）を見ると、上位の層は17名、中位の層は13名、下位の層は23名となっていた。下位の層が23名と多く、全体としてグラフがやや下膨れしているのはこれまで通りであったが、目を引くのは上位の層と中位の層が逆転していたことであった。2017年度は、上位、中位、下位、それぞれ11名、18名、24名となっており、下の層に行けば行くほど数が多くなっていたが、2021年度は上位の層が中位の層より4名多くなっていた。さらに、75点から89点までのある程度基礎力のある学生の層は8名、90点以上のかなり基礎力のある学生は3名いて、合わせて11名の本学のトップ集団を形成していた。29点以下のほとんど基礎力のない学生が10名いて、下位の層の23名と合わせて全体を引き下げたので平均点はそれほど上がらない形になってはいたが、基礎学力のある学生の入学が少しでも増えたことは喜ばしいことであった。坂戸キャンパスの平均点は51.8点、紀尾井町キャンパスは51.6点となっていて、ほぼ同じレベルであった。

次に、2022(令和4)年度の結果について検討する。前年度に引き続き、2017年度までと同様、同一問題を使用して対面形式で英語力調査を実施することができた。外国人留学生を除く79名が受験し、全体の平均点は50.3点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表19である。

表 19 2022 年度英語力調査結果（4 月実施：対面）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	79 名	50.3 点

前年度と比較すると、受験者数は5名増、平均点は1.8点の下落であった。前年からやや下がりにはしたものの、平均点で50点以上というのは近年では決して低い数値ではなかった。近いところでは2017年度（受験者数74名、平均点50.3点）とほぼ同程度の水準となっていた。得点分布グラフを見ると、ピークは2021年度、2017年度と同じ40～44点のところにあり、12名の学生がここにあった。2022年度は第2のピークは3つあり、上から70～74点、50～54点、45～49点のところに8名いた。注目すべきは70～74点という高いレベルにある程度の学生が集まって第2のピークを形成していたことであった。この傾向は前年にも

見られたが、前年の第 2 のピーク 60～64 点（8 名）を 10 点上回っていた。第 2 のピークの 50～54 点（8 名）と 45～49 点（8 名）はピークの 40～44 点（12 名）と一体となって 28 名という大きな集団を形成しており、全受験生の 3 名に 1 名以上がここに属していた。30 点から 74 点までの中間層の中の上位の層（60 点～74 点）と中位の層（45 点～59 点）と下位の層（30 点～44 点）を見ると、上位の層は 19 名、中位の層は 21 名、下位の層は 23 名となっていた。下位の層が 23 名と多く、全体としてグラフがやや下膨れしていたのはこれまで通りであったが、それでもほぼ同数の学生がそれぞれに点在していて、それぞれの層が 2 名差で肉薄していた。平均点が前年度を上回らなかった理由は、中間層以上の学生数と以下の学生数の差にあった。75 点から 89 点までのある程度基礎力のある学生の層は 4 名（前年 8 名）、90 点以上のかなり基礎力のある学生は 2 名（前年 3 名）いて、合わせて 6 名の本学のトップ集団を形成していた。これに対して、29 点以下のほとんど基礎力のない学生が 10 名（前年も 10 名）いて、下位の層の 23 名と合わせて全体を引き下げていたので、平均点は前年以上には上がらない形になっていた。坂戸キャンパス 53 名の平均点は 50.0 点、紀尾井町キャンパス 26 名の平均点は 51.0 点となっていて、紀尾井町キャンパスの方が僅かに高かった。

次に、2023（令和 5）年度の結果について検討する。2023 年度も前年度に引き続き、同一問題を使用して対面形式で英語力調査を実施することができた。外国人留学生を除く 60 名が受験し、全体の平均点は 49.7 点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表 20 である。

表 20 2023 年度英語力調査結果（4 月実施：対面）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	60 名	49.7 点

前年度と比較すると、受験者数は 19 名減、平均点は 0.6 点の下落であった。前年からやや下がりしものの、平均点で 50 点弱というのは満足のいく数値ではないが、近年では決して低いレベルというわけではなかった。近いところでは 2016 年度（受験者数 55 名、平均点 49.4 点）とほぼ同程度の水準となっていた。得点分布グラフを見ると、ピークは 50～54 点のところにあり、8 名の学生がここにいた。2022 年度と 2021 年度及び一時中断前の 2017 年度のピークが 40～44 点にあったことを考えると、ここ数年の中ではかなりピークが高いことが分かった。50～54 点のピークは、前年から大幅に上昇して平均点が 55.7 点になった 2014 年以後のことであった。第 2 のピークの位置も高く、55～59 点と 40～44 点のところに 7 名ずつの学生がいた。50～54 点のピーク 8 名と 55～59 点の第 2 のピーク 7 名の計 15 名は全体の 4 分の 1 の数を占め、大きな集団を形成していた。30 点から 74 点までの中間層の中の上位の層（60 点～74 点）と中位の層（45 点～59 点）と下位の層（30 点～44 点）を

見ると、上位の層は9名、中位の層は17名、下位の層は16名となっていた。中位の層が下位の層を1名ではあるが上回り、これまでの下位層になればなるほど人数が多くなる下膨れした形から脱却していた。75点から89点までのある程度基礎力のある学生の層は8名（前年4名）、90点以上のかなり基礎力のある学生はいなかった（前年2名）が、中間層の上位の層9名と合わせて17名の本学のトップ集団を形成していた。これに対して、29点以下のほとんど基礎力のない学生が10名（前年も10名）いて、平均点を引き下げていた。特に、24点以下が4名（24点、22点、18点、16点）もいたので、グラフの形は悪くはないが、平均点にしてみると例年並みという特異な結果になっていた。坂戸キャンパス34名の平均点は49.7点、紀尾井町キャンパス26名の平均点は49.6点となっていて、差異はなかった。

最後に、短大学生の最後の入学となった2024（令和6）年度の結果について検討する。2024年度も同一問題を使用して対面形式で年2回の英語力調査を実施することができた。従来通り、出題形式は全問マークシート方式、試験時間は1時間、全50問で100点満点の試験とした。外国人留学生を除く40名が受験し、全体の平均点は50.9点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表21である。

表 21 2024 年度英語力調査結果（4 月実施：対面）

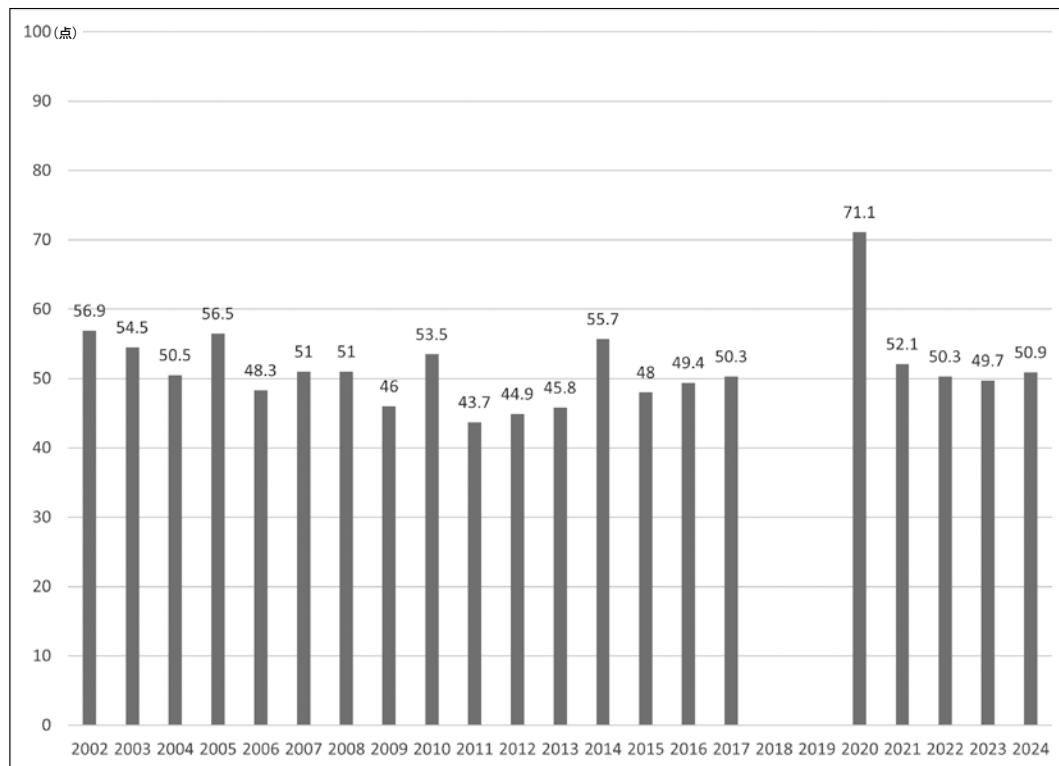
学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	40 名	50.9 点

前年度と比較すると、受験者数は20名減、平均点は1.2点の上昇であった。2025年度（令和7年度）以降の学生募集停止の影響で受験者数は大幅に減ったが、平均点で50点前後というのは、近年では平均的なレベルと言えよう。得点分布グラフを見ると、2024年度のピークは前年度同様50～54点のところにあり、6名の学生がここにいた。2017、2021、2022年度のピークが40～44点にあったことを考えると、前年に引き続き2024年度もかなり高いピークを維持していたことが分かる。第2のピークはふたつあり、55～59点と35～39点のところに5名ずつの学生がいた。55～59点の第2のピークも高い位置にあった。30点から74点までの中間層の中の上位の層（60点～74点）と中位の層（45点～59点）と下位の層（30点～44点）を見ると、上位の層は9名、中位の層は13名、下位の層も13名となっていた。中位の層と下位の層が同数の13名、その上に上位の層の9名という構造になっており、グラフの形自体は悪くなかった。90点以上のかなり基礎力のある学生はいなかったが、75点から89点までのある程度基礎力のある学生の層の3名は中間層上位の層9名と合わせて12名の本学のトップ集団を形成していた。29点以下のほとんど基礎力のない学生は2名と減少していた。例年ならば、29点以下のほとんど基礎力のない学生と中間層の下位の層が多く、

グラフが下膨れした形になるのであるが、2024 年度はそうはなっていなかった。この得点分布ならばもう少し平均点が上がっていてもよいはずであったが、そうはなっていなかった。その理由は、2 名のほとんど基礎力のない学生の点数の低さにあると思われる。1 名は 24 点、もう 1 名は 18 点となっていた。受験者数が 40 名と少なかったため、この 2 名が大きく平均点を引き下げていた。逆に言うと、ごく少数の基礎力のない学生を除いては、多くの学生がある程度のレベルを維持できていたとも言える。最高点は、82 点（紀尾井町キャンパス）、次いで 76 点が両キャンパス 1 名ずつ計 2 名、74 点、70 点（どちらも坂戸キャンパス）と続いていた。2011 年度から 2013 年度にかけて平均点が 45 点前後であった時と比較すると、かなりの底上げがなされたと考えられる。学生の反応も当時と比べて大きく改善したように感じられる。坂戸キャンパス 24 名の平均点は 48.9 点、紀尾井町キャンパス 16 名の平均点は 54.0 点となっていて、大きな差がついた。この理由は、大きく平均点を引き下げている学生が 2 名とも坂戸キャンパス所属であったためと考えられる。

これまで、2002 年度から 2024 年度までの英語力調査の結果について振り返りながら検証してきたが、4 月実施の平均点をまとめたのが次のグラフである。

英語力調査年度別平均点推移（2002 年度～ 2024 年度：4 月実施）



改めてグラフを見ると、調査を開始した 2002 年をピークとして、短期大学生の英語基礎力は年々低下していたことが分かる。途中で数回の反発を経ながら 2011 年から 2013 年で底をつき、その後は徐々に上昇に転じている。途中での反発の詳細については、当該年度で詳しく述べてきた通りである。前述の通り、2018 年度と 2019 年度の 2 年度分についてはデータがなく検証することができない。また、2020 年度の平均点が極めて高いのは、対面試験ではなく WebClass を利用した自宅でのオンライン試験であったためと考えられる。

3. 2005 年度から 2025 年度までの TOEIC IP テスト結果について

本学では、年に数回、学内において TOEIC® Listening & Reading IP テストが実施されており、2005 年度以降、12 月に実施される試験を受験するように指導してきた。結果及び全学との比較は表 22 の通りである。

表 22 2005 年度から 2025 年度までの TOEIC IP テスト結果 (12 月実施)

年度	全学 (坂戸)	全学 (紀尾井町)	短大 (坂戸)	短大 (紀尾井町)
2005	259 点 (607 名)		287 点 (21 名)	
2006	278 点 (344 名)		240 点 (14 名)	
2007	286.1 点 (149 名)		253.5 点 (48 名)	
2008	270.8 点 (175 名)		235.4 点 (54 名)	
2009	282.9 点 (467 名)		235.5 点 (50 名)	
2010	305.2 点 (387 名)		247.5 点 (59 名)	
2011	299.4 点 (284 名)		225.6 点 (47 名)	
2012	318.5 点 (244 名)		235.3 点 (28 名)	
2013	329.7 点 (248 名)		238.5 点 (17 名)	
2014	279.6 点 (257 名)		253.9 点 (19 名)	
2015	318.2 点 (185 名)		245.6 点 (22 名)	
2016	286.3 点 (300 名)		237.6 点 (26 名)	
2017	304.4 点 (264 名)		249.0 点 (55 名)	
2018	データなし			
2019	データなし			
2020	384.9 点 (102 名)		356.2 点 (4 名)	
2021	425.2 点 (51 名)	402.2 点 (12 名)	430 点 (3 名)	500 点 (1 名)
2022	396 点 (45 名)		440 点 (1 名)	
2023	381.7 点 (47 名)	366.6 点 (6 名)	なし (0 名)	347.5 点 (4 名)
2024	404.9 点 (38 名)	413.3 点 (3 名)	280 点 (1 名)	なし (0 名)
2025	342.3 点 (45 名)	485 点 (1 名)	なし (0 名)	なし (0 名)

2005 年度から 2017 年度にかけて、短期大学生の平均点は概ね 200 点台前半、良くても 300 点に届かない程度であった。短期大学生が毎年全員受験してきた訳ではなく、上位クラスと希望者のみとしてきたため、この数値は参考程度に考えた方がよいかもしれないが、2011 年度の TOEIC の平均点が一番低い結果になっていたことは、やはり先ほどの 2011 年度英語力調査結果の低さを裏付けているようにも感じられる。2018 年度と 2019 年度のデータがないのは、前述の通り筆者が海外に派遣されたためデータを取得できなかったためである。2020 年度から始まったコロナ禍による受験制限とその後の学生の経済的負担の増加のために受験者数は大きく減少し、現在に至っている。英語必修科目が「TOEIC イングリッシュ」から「コミュニケーション基礎英語」に変更され、TOEIC 試験からより実践的なコミュニケーションの英語にシフトしたことも受験者数減少の理由かもしれないが、それに加えて学生の TOEIC に対する意識の変化も理由となっているような気がしてならない。

4. おわりに

最後にもう一度、全体の調査結果を振り返り、これまでの英語教育の指導について考えてみたい。2002（平成 14）年度から 4 月実施時の平均点の推移を見ると、2002 年度：56.9 点、2003 年度：54.5 点、2004 年度：50.5 点と年々下降の一途をたどり、2005 年度に 56.5 点といったん上昇に転じた。しかし 2006 年度に 48.3 点と大きく下げ、2007 年度：51.0 点、2008 年度も 51.0 点と戻したが、2009 年度は 46.0 点と下げた。2010 年度は 53.5 点と大きく上昇したが、2011 年度は 43.7 点と最低を記録し、2012 年度：44.9 点、2013 年度：45.8 点と 3 年連続で 45 点前後の低水準で推移した。2014 年度に 55.7 点と 10 点近く上昇したが、2015 年度に 48.0 点と大きく下落し、2016 年度は 49.4 点、2017 年度は 50.3 点であった。2018 年度と 2019 年度のデータはなく、オンラインで実施した 2020 年度 1 月は 71.1 点（参考値）、2021 年度は 52.1 点、2022 年度は 50.3 点、2023 年度は 49.7 点、2024 年度は 50.9 点であった。2002 年度からの数値を見ると、2011 年度までは下がり続け、その後に緩やかに回復し、2024 年度までには 50 点前後に落ち着いている。途中、突発的に高い年度（2005、2010、2014 年度）と低い年度（2009、2011、2012、2013 年度）を挟みながら、概ね 50 点前後で推移していたと見ることもできよう。実際、データのない 2018、19 年度と参考値扱いの 2020 年度を除いた平均点は 50.45 点となっているので、2002 年度から 2024 年度までの短期大学学生の英語力の基準は 50 点であったと言える。

授業のやり方については、コロナ禍を境に大きく変わった。教室での紙ベースの資料配布と CD を使った音声練習による授業方法から、オンラインとデバイスを最大限活用した授業

へと変更された。具体的には、WebClass を利用した課題の提出と試験の実施、Teams への授業資料のアップロード、パソコンとスクリーンを用いた音声・映像の授業への導入等が挙げられる。オンライン授業は1年限りであったが、そこで得たノウハウは、その後の対面授業で活かされ、現在ではこれらをかなり効果的に授業に活用できていると思っている。加えて、対面ならではのペアワーク等のアクティブラーニングの要素も授業に取り入れ、単に学生が座って聞いているだけの授業ではなく、手や口や体を動かし、間違ってもいいので何とかコミュニケーションを取るような授業にも改善されてきている。今後はこのような授業方法を継続しながら発展させることに加え、進化の目覚ましい生成 AI やアプリ・ゲームの要素を授業に効果的に導入することにより、来年度からは4年制の城西大学の学生たちの英語力向上に向けてより魅力的な授業に改善していこうと考えている。城西短期大学は今年度をもって閉学となるが、ここで得た授業方法とスピリットを城西大学に持っていくことは、責務であると重く感じている。